

馬場孤蝶

北村透谷君



北村透谷君



北村透谷君の処女作は『蓬萊曲』と云うので、バイロンの式の韻文戯曲であつた。同君が島崎藤村君と友達になつたのは、たしか二十五年頃だろつと思つ。巖本善治氏の『女学雑誌』が、当時大分あたらしい派の文芸的作品を載せて居たので、其の雑誌に縁故の深かつた島崎君が、原稿のことか何かで、北村君と知り合いになつたのであろつかと思つ。二十五年の暮か二十六年の初めか、一寸覚えなないが、島崎君が旅行に出る時に、其の時分同君が

やっていた明治女学校の教師の後任に、北村君を推薦した。私は、二十六年の十月頃から翌年の春までに北村君と三四回会ったのみであつた。私は同君を何となく捌さばけない人だと思つた。妻もあり、子もある人としては、人生の智識などが割合に狭い人のように思つた。で、あんまり親しくもしなかつたし、真面目な話もして見たことはなかつた。只其の時に気が付いたのは、神経系統に幾らかの異状があるに違いないということであつた。で、二十七年の夏かと思うが、北村君が死んだという知らせを得た時に、直すぐに自殺ではなからうかと思つて、「病氣

ですか」と殊更に聞いたくらいであった。北村君の死んだのは、思想上の原因もある。又、生活上及び家庭の關係もあろうが、単に自殺と云う行為だけを引き離してみれば、肉体上、即ち健康上の異状ということをおもな原因と見倣さなければなるまい。私の知って居る人で、自殺をした人は外に二人程あるが、それ等の人々は皆前から神経に異状を来して居たらしく思われる。神経に異状のある人は皆自殺すると云う議論は成り立たないのである。ところが、神経に異状がなければ、大抵は自殺しないと云えようかと思われる。尤も刑罰を受けるのを厭うて自殺

する人の場合は特例であろうけれども。

斯う云ったところで、私は、詩人とか、思想家とか云う人々の自殺を、馬鹿なことだとか、笑う可きことだとか云うのでは、決してない。そう云う悲しむべき行為に達するまでの径路、そう云う行為を実行する当時の心持には同情も表するし、或る場合には羨ましくも思えることがないではない。只しかし、事実として言えば透谷君の最後の如きは、どうも其の原因が神経系の病気に関係があると云うまでである。

北村君は小田原の生れだという。之れは全く伝聞であ



るが、北村君のお母さんは、同君の生母ではなかったぞうである。数寄屋橋外の四つ角のところに、小さい煙草屋が今もあるが、其処が同君の家であつた。私は其処へ一二度行つて、二階で北村君に会つたことがあるが、お母さんは小柄な品のない並の町家の内儀さんと云うような人であつた。同君の細君の父親と云うのは、自由党の政治家であつたが、同君が其の細君と一緒にゐたのは、いろいろ込み入つた事情があつたやうに聞いて居る。それで同君が生家の人々と別居してゐるのも変であるし、同居して居ても又うまく行かぬというやうな有様で

あつた上に、当時は原稿生活の未だ困難な時代であつたので、同君のようなプライドのある、神経質な人には随分厭なことが多かつたらうかと察しられる。そんなことも、北村君の身体には随分応えたことであらう。要するに同君にとっては、時代も、境遇も、体質も皆不利なものであつたのだ。しかし、私は、前に云つた通り、北村君のことを余り多くは知らない。島崎君の『春』の中の青木と云うのが、北村君のことだそうだが、私の伝聞したところでは大抵『春』に書いてあるところは事實に近いもののように考えられる。

それから北村君の、文学上の事業であるが、同君が『文学界』へ物を書いた時分には、中々人気があつた。同君の一種の理想主義、強みのある文体などが、其の頃の新思潮を求めると云うような若い人々の間には、大いに迎えられるて居たようであつた。一言にして云うと、在来の文学に籠つて居た因習的な道学的觀念を破壊した。それまでの人々が持つて居た浅薄な、文学即实用主義と云うようなものに打撃を与えた。と云うのが北村君の功績の一つであろう。又一方から見れば、当時の状態では、文学は洒落者の仕事、寧ろ道楽のように考えられて居たの

であるが、それが、教育ある若い人の、真面目な精神上の欲求を満たすに足るものであるということをも、若き人々に明らかに示したのは北村君の功績であろう。要するに今日まで進んだ、新しき文学の爲めに道を開いた人、文学が今日まで渡って来る道の飛石の一つになった人であることは、疑いがあるまい。

尚お其の上に、形式の方から云えば、北村君は明治文学に対して認むべき貢献をしている。それは、同君の書いた韻文戯曲の形式である。今日の自由な詩形から見れば何んでもないように見えるであろうが、当時ではああ

云う試みでさえ、非常に新しい物であった。韻文で長いことを叙するということは、極く僅少な人の試みたことであつて、北村君のように広い大きい範圍にまで、韻文を使って進もうとした人は、そうたんとない時代であつた。そう云う点に於ても、同君の開拓者としての功績は没すべからざるものであらう。

只、私どもの欲を云えば、北村君は浅薄な古い道学的觀念を破ったけれども、同君自身一種の道学的觀念に囚われて居るようなところがあつた。従つて文学者としては働くべき天地が狭くはなかつたか、生きていてもそう

長く勢力を有し得る人であつたか、どうだか私には決し兼ねる。古い時代との間に立つ、情熱のある思想家と云うのが、或は北村君の位地ではなかつたらうか。







日本文学電子図書館

---

北村透谷君

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、  
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館